

他科学館の目をひくサイン事例

渡部 義弥*

概要

サイン＝掲示標識は、手書きのかんたんな貼り紙や黒板への書き込みから、印刷やカッティングシート、造形を加えたもの、電子機器を利用したものなど様々なものが用いられる。また、素材や製法だけでなく、そこに書かれる文章の内容や文体、かなや漢字の配置や割合、ピクトグラムの利用なども重要な要素である。さらには、サインをどの位置にどの高さで、どの角度で設置するかによっても効果は大きく異なる。

サインの制作は、手書き、あるいはワープロ出力の貼り紙など素人でも容易に行えるために、プロのデザインが入らないで行われることが多い。そのため、工業製品とちがって、品質に極めて大きなバラツキがおこりやすい。一方で、現場でサインの対象者、たとえば来観者と向き合いながら、長年修正をかさねたサインは、凡百のデザイナーなどかなわないほど効果的になることもある。本報告では、同種施設であり、対象者も似通っている他の科学館のサインから、目をひき効果的と思われるものを集めた。もって、大阪市立科学館のサインを考えるさいの材料となれば幸いである。

1. はじめに

科学館におけるサイン＝掲示標識は、来観者に適切な情報を提示し、様々な行動をとるさいに参考になり、便利であり、快適であるために存在するといえる。もちろん「禁煙」であるとか「進入禁止」のように、観覧者全体の快適さを向上させるために、一部の方の行動を規制する場合もある。

また、サインは様々な人に情報を伝えなければならない。様々な年齢、能力、場合によっては日本語が読めない人にも情報を伝える必要もでてくる。科学館に初めてくる人にとっては、スタッフが当たり前と思いき、気にもかけないことが伝わらないことがある。たとえば「プラネタリウムの投影開始は1時から」という情報は、プラネタリウムがなんであるか、投影とはどういう行為かが分からないと意味をなさない。

演劇の公演などでは「開場」と「開演」の時刻が示されることがある(図1)。これも意味がわかっていないと、無理をして開場の時刻にこないで、公演が見られないと思う可能性がある。一方で、オールスタンディングのライブでは「開場」の前に現地にはないと、よい場所がとれないことが起こる。全席指定の公演とは違うわけである。したがって、この場合はオールスタンディングがど

ういうものであるかを、来場者があらかじめ知っておかなければ、適切な判断ができない。

趣味的なものは、来場者の努力をおおいに頼ってもよいであろう。しかし、公共施設であり、だれにも来場してほしい社会教育施設である科学館では、そのような態度は間違っているとはいわないまでも、問題があるとはいえる。

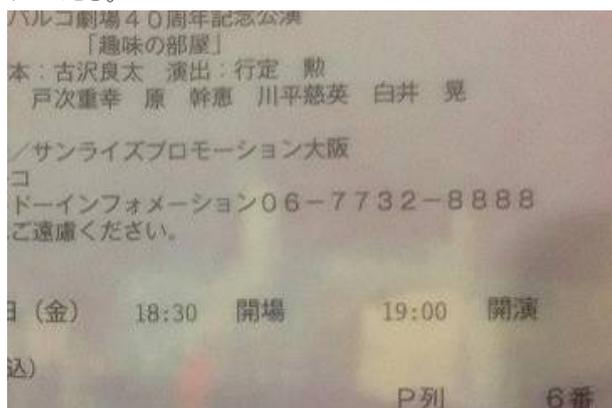


図1. 2つの時間が示された演劇のチケット

では、同種の施設ではどのようにしているのだろうか？ サインは簡単に作れるため、安易なものも多いが、一方で長年にわたり、来観者と向き合いながら改良されよいものになっているものも見受けられる。本稿ではそうしたよいと思われる事例を紹介する。

*大阪市立科学館
yoshiya@sci-museum.jp

2. 館の存在を示すサイン

大阪市立科学館は比較的リピーターが多いが、それでもはじめて来られる方は、年間数十万人にのぼる。そうした方たちにとっては、もより駅から館までの案内と、そこが間違いなく目的地であることがわかるサインは重要である。いくつかの事例を紹介しよう。以降、説明はそれぞれの写真のキャプションにて行う。



図1. 道路標識。青地に白で視認性が高い。矢印もはっきりしている。英語表記も見られる。

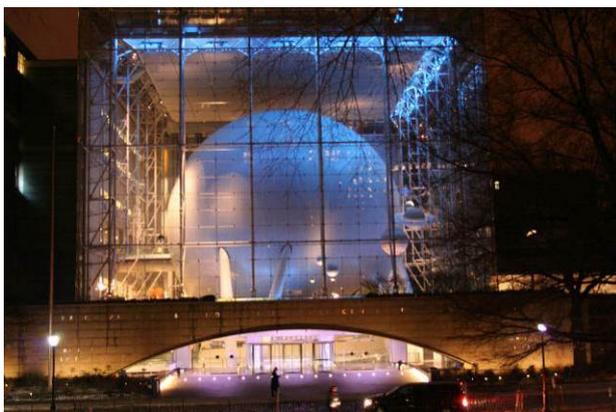


図2. 周囲の建物とはあきらかに違う外観。



図3. 屋外展示。日時計。



図4. なんだろうと思わせるオブジェ



図5. 視認性がよい看板。矢印と中央の横線により、どの施設なら、どちらに行けばよいかが明確



図6. 垂れ幕、フレームがあり最初から垂れ幕をかけることが考えられている。

*大阪市立科学館
yoshiya@sci-museum.jp



図7. 距離と進路を明確に示した案内

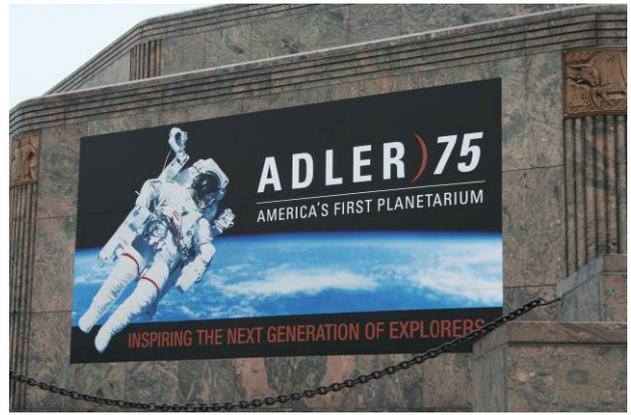


図11. クラシックな外壁にモダンな大型シートを貼り付け。アメリカ最初のプラネタリウムのコピーも。



図8. 非常にわかりやすいレストランの案内。ここでは、科学館と附属レストランの他には一切施設がない

3. 告知のサイン

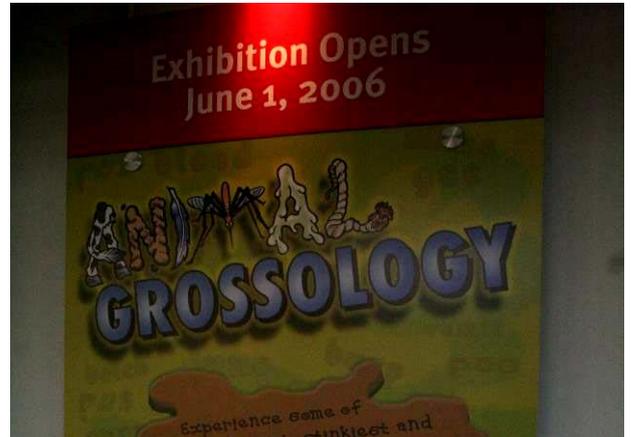


図12. 告知内容と日付の部分を分離したデザイン。予告ポスターなのでスタート日のみが書かれている。日付部分は、すべて同じデザイン。スタートすると、こんどは終了日のみが書かれる。



図9. 「看板」ロケットの屋外展示



図13. 大型で絵とタイトルで見せるポスター



図10. 地下鉄駅名が自然史博物館



図14. 屋外に、セット料金の表示。チケット売り場は階段をのぼってすぐ



図17. 売っているものを目に引くように表記した売店。



図15. 座席番号を大きく背もたれに描いたもの。背もたれはメッシュになっており、その裏に文字がある。席を見つけやすい工夫



図18. 導線を誘導する足下サイン



図16. 強調したい数字が大きく描かれたチケット。上の座席とセット。座席とフォントもあわせてある。

4. 注意・警告のサイン



図19. ドアノブに CLOSE、さわるときに必ず気がつく



図20. 子供専用のスペースであることを目につくメインの看板の下にさりげなく書く(単独で注意を書かない)



図21. 飲食禁止ではなく、飲食「可能」場所の案内。ダメではなく、こうしましょうという誘導。

5. 感謝を示し、人を気持ちよくさせるサイン



図22. 帰るときに目がつくところに、ご来場ありがとうございましたの看板



図23. 一部を立体的にし、これからどうなるかを大きく書いて期待をさそう、新館工事中の案内

6. おわりに一様なサインを見て

サインで目を引いたものをあらためて見てみると、それは、人の心理を考えて作られたサインだといえる。

何か、行動を起こそうというとき、まず最初に、どんな情報がほしくて、次にどうするのか？あるいは、まず目を引き、振り向かせてから、情報を提示するようにしているのか。こまったときに、助け船のようにサインがあると心底ありがたいと思うし、人への呼びかけがそのまま気持ちに入ったサインも心に残るものである。

そうすると、サインというのは、人と人との会話を置き換えたものといえる。厳しい言葉で叱責するのが気持ちよいのであれば、叱責のサイン「XX するな」もよいかもしれない。しかし、実際に自分でやって、相手も気持ちよくないのであれば、ありがたいと思わないのであれば、そのサインは目にとまらず、心に響かず、効果を示さず、自ずと失敗といえるのではなかろうか。

なお、今回は、過去10年ほどでとりためた、内外の視察からサインをひろって見たが、最近はともかく、あまりそうしたものを記録に留めていないこともわかった。基本的に展示やプラネタリウムの機器類を写真に撮影しているのが目立つ。

今後の視察では、館の付随的事業にも注目して、より多くの写真を撮影すべきと報告を書きながら強く感じた次第である。